教室はドラマ令和編

旅行記①

インドネシアのジャカルタへ

年齢の平均値28歳。若い人が多い国

「教室はドラマ」これから数回は旅行記です。初任研の記録ではありません。関心のない方はスルーをお願いします。

「平成」から「令和」への連休を使ってインドネシアへ行きました。インドネシアというとバリ島が定番の観光地です。でも、今回はバリ島ではなく、インドネシア国内をあちこち（笑）。

少しだけ社会科の勉強を。世界第４位の２億５５００万人の人口を誇る大国インドネシア。その首都であるジャカルタは都市圏人口が３２００万人と、東京都市圏に次いで世界第２位のメガシティです。中心部の人口は一千万人にもなります。また国全体の中央値年齢が28歳と若い国です。現在、世界一の人口は東京だけど、10年後にはジャカルタが世界一になるという予測があります。

ジャカルタは過密なので交通渋滞は日常茶飯事です。事故渋滞のため、私は最終日の帰国の飛行機に間に合わないというとんでもないトラブルに見舞われました。インドネシアに滞在中に大統領が首都移転を正式に表明したというニュースを見ました。大きな理由の１つはジャカルタの渋滞による経済損失が大きいことだとのこと。

アジアはどこを旅行しても若い人が多いことを実感します。サービス業を行う人も多いのです。人件費が安くつくからのようです。

前置きが長くなりました。今回はマイレージの優待サービスを使っての旅行でした。往路はシンガポール航空です。人気が高い航空会社です。ほぼ定刻にジャカルタの「スカルノハッタ空港」に到着します。荷物を受け取り空港出口に近づくと長男が手を挙げています。そうです。長男がジャカルタに仕事で駐在しているので子どもを頼ってのインドネシア旅行となりました。

市内を２日間観光した後、ジョグジャカルタへ向かいました。この地名はほとんど知られていませんが、ボロブドゥール遺跡のある町です。外国に限らず旅先に遺跡などの歴史的なものがあればできれば見るようにしています。それが世界的に有名な遺跡であればなおさら興味を引きます。ジャカルタとジョグジャカルタはどちらもジャワ島にあります。でも、飛行機で移動します。約１時間。

ボルブドールという遺跡のことは以前から耳にしたことはありました。でも、ジャングルに埋もれていたという程度のことしか知りません。ハリムという小さな空港が市内に近いので、そちらからバティックエアというＬＣＣを使います。バティックエアはＬＣＣとしては上位にあり、液晶画面やＵＳＢの端子があります。座席も狭くはありません。さらに嬉しかったのは

ボトルに入ったミネラルウォーターと小さな菓子パンが配られます。ＬＣＣはサービスが有料というのが基本かと思っていたのでうれしい想定外です。

ジョグジャカルタの空港では中辻さんが迎えてくれます。実は中辻さんのガイドを受けることは今回の旅行の楽しみの１つでした。単に日本人ガイドというだけではなく、現地在住の日本人です。中辻さんはボロブドゥールで旅行会社を経営しており、インドネシア人のご主人が社長です。

ボルブドールへ行くことにしてからネットで情報を探していました。そしたら中辻さんという存在を探し当て、メールで案内をお願いしました。２カ月ほど前から何度もメールのやりとりをしましたが、その情報がハンパではなかったです。ホテルやレストランの選択は「地球の歩き方」しか情報がない中、中辻さんはレストランの特徴として例えばビールがないなどのことも事前に知らせてくれました。私にはビールの有無は決定的な条件ではないけど、インドネシアではビールがないレストランの方が普通であることが分かりました。

ホテルについては近所にレストランがあるかどうかという大事なことを事前に知ることができました。

とはいいつつも、３日間の観光はすべて中辻さんにお任せにしました。その方が楽しめるだろうと判断したからです。これが正解でした。

１時間遅れの飛行機をジョグジャカルタの空港で中辻さんは待っていてくれました。「荷物はこれだけ？」と言われてしまいました。ジャカルタにスーツケースは置いてあります。２人ともリュックとショルダーバッグだけです。聞きたいことは山ほどあるけど、ドライバーの待つ駐車場へ急ぎます。それにしても日本語での案内は本当にストレスがありません。しかも観光地の案内だけではなく日本人の目線でジョグジャカルタの普通の生活を聞かせてくれます。興味深いことばかりでした。車の中では話が絶えることはありません。中辻さんは大阪人のゆえんか、疲れを知らずに話し続けてくれます。

まずはランチをいただきます。水田の見える東屋のようなお店です。風が心地よい。

ランチの食堂

教室はドラマ令和編

旅行記②

世界遺産「ブランバナン」

９世紀の建造後、千年も埋もれていた

ジョグジャカルタでの最初のランチ。この食堂はさほど大きくはないけど、東屋を一回り大きくしたような竹で作った小屋のような建物があり、そこからは水田が見えます。手作業の稲刈りをしているお百姓さんが３人ほどいます。１年に何回お米が取れるのかと中辻さんにたずねると「稲刈りが終わるとすぐに田植えをする。そのサイクルで回っているのでローカルに聞いても何回ということは分からない」とのこと。

稲刈りと田植えが隣り合わせの田で行われているということが普通にありえるようです。水田ではあるけど、水はやや少なめ。品種が違うのかも知れません。耕運機を使っているのを目にはしたけど、基本的には手作業でのお米作りのようです。近くの人が助け合って作業をします。

ランチの後は今、売り出し中の観光地、松林へ行きます。こんな情報は「地球の歩き方」には出ていません。外国人の観光客もほとんどいません。地元のインスタ映えスポットなのです。垂直に伸びた松林が丘陵に広がっています。しばらく歩くと、写真スポットがあります。地元の若いグループが写真を撮っています。順番を待っているのに、何枚もポーズを変えて写真を撮るので回転がとても悪いです。でも、じっと待つしかありません。

見ていると、一眼レフのカメラで写真を何枚も撮り、その場でパソコンに取り組みながら観光客と話をしているグループもあります。カメラマンに費用を払って撮ってもらっているのです。自分のカメラを持っているのに。写真撮影に時間を取り、その後の写真を選んだり、転送することにも時間がかかります。中辻さんが言うには「あるとき、待ち時間を聞いたら３時間と言われた」そうです。ローカルの若い人たちには写真を撮り、それをＳＮＳにアップすることがとても人気があります。フォロー数も多いらしい。

垂直に高く伸びた、広い松林も素晴らしかったけど、インスタスポットにおけるローカルがとても興味深かったです。日本でもインスタグラムは人気だけど、インドネシアのそれはさらにすごい。若者人口の違いも関係あるのかも知れない。

初日の見学のメインは「ブランバラン遺跡」です。この遺跡はボルブドールほどには知られていません。私はガイドブックを見るまでは知りませんでした。でも、世界遺産になっており、ジョグジャカルタでは必見です。一番、感動するのは全景を最初に見たときです。ブランバランは背が高いです。ボルブドールと共通しているのは石で作られていること、レリーフが多いこと、さらに９世紀頃作られ、その後、火山の噴火で埋まり、千年近く知られていなかったことです。ジャングルの中に埋もれてしまっていたというのです。

19世紀になり、インドネシアを植民地にしていたオランダが遺跡を発掘し、修復したものが今に至っています。ガイドさんの話ではもしかすると埋まっていたのは幸いだったかもしれないというのです。

このあたりは仏教、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教などが歴史的に入り交じっています。となると、ヨーロッパや中東では戦争が起こった歴史がありますが、インドネシアではそれほどの争いは起こらなかったと中辻さんが教えてくれました。今でもいうところの「みんな違って、みんないい」という精神なのでしょうか。

それにしても、遺跡はすべて石で作られています。花崗岩なので比較的軽くて柔らかいとはいえ、石に違いはありません。川岸の石切場から運び、細かい細工をしています。建設当時は接着剤はありません。石に凹凸を付けたり、テトリスのように組み合わせの形を工夫して強度を持たせています。そのことは石組を見るとはっきりと分かります。数十年の年月をかけて建設したようですが、当時の記録は残っていないので詳しいことは未だに分かっていないようです。ただ、そのころすでに文字があった中国の歴史書に記録されていたり、ボルブドールではサンスクリット文字が刻まれており、年代の特定につながったという説明を中辻さんから受けました。その文字が刻まれている石も見ることが出来ました。歴史を身近に感じました。

中国の歴史書といえば、日本の邪馬台国については中国の記録にあるだけです。日本には当時まだ文字がなかったので記録がありません。中国四千年の歴史は今さらながらすごいことです。

ブランバナンは公園になっており、他にも重要な遺跡があります。説明をうけましたが、覚えてはいません（汗）。

この日の最後の見学地はイジョ寺院での夕日です。夕日はボロブドゥールで見ることも人気があります。

教室はドラマ令和編

旅行記③

「これぞアジア」のたくましさ

庶民の産業と生活の一端を見学

「ボロブドゥール遺跡の夕日」も人気があります。イジョ寺院での夕日はまだローカルの間に知られているだけで、旅行書には出ていません。

イジョ寺院は高台にあるのでムラビ山や田園風景がよく見えます。日没まで１時間ほどありました。寺院の遺跡から見る日没。幸い雲がなかったので真っ赤になって沈んでいく夕日をじっと眺めていました。風が心地よく当たります。こんなにゆっくりと日没を見るなんてことは生まれて初めてのことです。平和な非日常の時間帯でした。

イジョ寺院で日没を待つ

日没が過ぎると一気に暗くなります。ボロブドールにある「フェニックス」というホテルが今日の宿です。このホテルはかつての富豪の屋敷を一部使っているところで、コロニアル風という中庭が素晴らしいです。かつて日本軍が駐留していた時は接収して「やまとホテル」として運用していました。

夕食は中辻さんに紹介してもらったホテル近くの「中華風シーフードレストラン」です。中辻さんはこともなげに「いいお店です」とのことだったけど、私にはかなり敷居の高い食堂でした。これぞアジアの食堂です。入り口には戸も壁もなく、狭い歩道をはさんですぐ道路です。バイクや自動車がエンジン音を響かせて走ります。繰り返すけど「これぞアジア」。アジア人の私が言うのも変ですが、夕食をいただきながら旅の醍醐味を感じざるを得ません。

問題はメニューがインドネシア語なのです。英語は少しは通じましたが、料理の説明を聞けるほどではありません。注文したのは無難なナシゴレンと他に２品。ビールはなかったのでコーラを頼むと、冷えていない瓶コーラが届きます。その後、氷がつまったコップが。なるほどこの中にコーラを入れて氷で冷やすということか…。氷が溶けると薄くなるなんてことは考えてはいけません。氷はかつては水道水で作っているのでお腹によくないと聞いていましたが、氷を捨てるわけにはいかず氷の世話になります。

「これぞアジア」テラスのようなシーフード食堂

翌朝は雰囲気のある中庭で朝食をいただきます。他には欧米人がいますが、アジア系は私たちだけです。このホテルの雰囲気は欧米人には人気があるようです。屋台のようにその場で何点かは調理してくれます。焼きそばは見たところ日本の物と似ていたいのでお願いしたところ、ソース味ではなく、微妙でした。

ジョグジャカルタでの２日目は普通の生活や仕事を見学しました。これは私が希望したわけではなく、中辻さんが設定してくれたものです。私たちが興味を持つだろうと考えてのことです。最初は蜂蜜のお店です。庭には蜂蜜を取るための箱がいくつかあり、その中のスリットを取り出してくれます。そこにはミツバチが群がっています。でも、飛び出すことはないので危険はありません。お店の人はネットも手袋も使うことなく、作業しています。

次に豆腐工場。直径２ｍ近い大きな鍋があり、薪を燃やしています。固まった豆腐を何段にも重ねています。その型枠は竹で作ってあります。金属やプラスチックの道具は少ないです。その横には食事のための厨房がありました。見せていただくと、大きさの異なる鍋を壁にぶら下げています。冷蔵庫も、プロパンのボンベやコンロもあり、使いやすそうです。

自動車が１台しか通れない狭い路地を通り、入ったところには陶器を作る工場が何軒かつらなっています。ボロブドゥール遺跡の象徴であるスチューバという円錐の置物がたくさん並んでいます。目の雨で手動のろくろを上手に操作してスチューバやカップを作るところを見せてくれました。「やってみる？」とまで言ってくれました。わらを燃やして素焼きをしています。

観光でこういった工場を見学すると、土産物を勧められることが普通です。でも、そもそも土産物を作っているだけで、販売はしていないようです。ジョグジャカルタの普通の産業の１つを見せてもらったわけです。歩いていると、バナナの房が軒先にころがっていました。理由は分からないけど、捨ててあったようです。バナナの大きな木があり、花がついているのがありました。そこにバナナができるそうです。めしべの先の子房が膨らむのでしょうか。

軒下でかまどで鍋を煮ている女性がいました。のぞいていると、蓋をとって煮物を見せてくれました。笑顔で対応してくれました。後で写真をみて、思うことがありました。冷凍食品よりはこの鍋の煮物の方がおいしいはずです…。

このあたりでは生活を見せてもらうことには抵抗がないというし写真を撮るとむしろ喜ばれるとか。そういえばある寺院で子どもの写真を撮らせてもらうと、５歳児ぐらいの子がポーズを取ってくれました。インドネシアは犯罪が多いと聞いていたけど、この人柄の良さ。うーん。

教室はドラマ令和編

旅行記④

ジョグジャカルタ旅行のお勧め

「心の友」を知らないインドネシア人はいない

「フェニックス」というホテル近くの中華風シーフードレストランでコーラを注文したら、冷えていない瓶コーラと氷が入ったコップがでてきたことは前号で話題にしました。

東南アジアでは水道の水を飲むとお腹をこわすというのがいわば常識です。私も、かつてタイ・マレーシアを１週間ほど旅したときに途中でお腹がシクシクと痛くなって困りました。当時、水道の水は飲まないように気をつけていました。心当たりは氷です。

自動車のそばをすり抜けるバイクの群れ

その後は氷にも注意しなければと思っていました。

そんな自己防衛をしている中での、コーラと氷のコップです。躊躇しました。でも、中辻さんの話では「ちゃんとしたお店で出す氷はミネラルを使っている」とのことでした。まだ旅が始まったばかりなのでここで体調を悪くするのはいやなので迷いはあったけど、氷の中にコーラを入れて冷たくなったのを飲みました。

その後。なんともありませんでした(笑)。良かったです。この13日間のインドネシア旅行では氷を使った飲み物を何度も口にしました。幸い一度もお腹が痛くなることはありませんでした。私の耐性が高くなったからか、氷の質がよかったからか。おそらく氷が問題なかったのでしょう。

ペットボトルの水はどこでも手に入ります。そして高い気温なのにほとんどが冷えていないのです。生ぬるい水を飲むことに慣れてしまいました（笑）。

バイクタクシーに乗ってスマホを操作(^_^;)

インドネシアのペットボトルは材質が薄いです。ペコペコなのです。といって割れたり、穴があくわけではないので問題はないけど、１つ問題が(笑)。それはフタが開けにくいのです。日本のペットボトルのフタは２cmほどあるので回しやすいです。インドネシアのフタは１cmほどしかありません。おまけに固い。さらに本体のペットボトルは先に書いたようにペナペナです。強く握れないので力が入りません。バテックエアという飛行機の中でもらった水のフタは何としても開けられず隣の乗客に手伝ってもらいました。たいしたことはないエピソードですが（汗）。

別の話題。ジャカルタ駐在の私の長男が「ローカルと一緒の食事の席で、最後にみんなで合唱するのは五輪真弓の『心の友』。ローカルで知らない人はいない。なのに日本人はほとんどこの曲を知らない」と言っていました。

このことが中辻さんとも話題になりました。中辻さんも全く同じことを言います。日本人の旅行者にこの話をすると、不思議な顔をすると言っていました。

中辻さんは「この話題を日本語ガイドに教えてやります」と言います。プロとしてのよりよい説明ができるようにとのことのようです。中辻さんの会社のサイトを見ていると、小さいから可能なのかもしれないけど、日本以上にきめ細かいことに驚きます。これがインドネシアの旅行会社とは。

五輪真弓の話が面白いということは現地ガイドは分からないはずです。当たり前のように「心の友」を知っているわけです。その曲を日本人が知らないということは日本人でないと分からないこと。

中辻さんのこの姿勢はジョグジャカルタを愛し、ジョグジャカルタのガイド仲間とも良好な関係を作っているということでしょうね。

ここからはジョグジャカルタへのお誘いです。バリ島旅行をする際は１日、ないし２日を割いてジョグジャカルタへ行くことをお勧めします。バリ島からジョグジャカルタへは飛行機で１時間半ほど。料金は五千円以下だと思います。朝出発して２日目の夜戻るという日程ならかなりジョグジャカルタを知ることが出来ます。ガイドは中辻さんを強くお勧めします。「ジョグジャカルタ　中辻」と検索すると、中辻さんの会社の日本語サイトが見られます。

ボルブドールで家族を持って生活している日本人のガイドの中辻さん。中辻さんの話はすべて興味深い。遺跡の説明も詳しかったけど、生活のことを何でも誠意を持って話してくれます。

ジョグジャカルタ旅行の話はまだ続きます。編集上の都合でコーヒーブレークをはさみました（笑）。

市場でココナツを買ってジュースを飲む。全くおいしくなかった。80円

教室はドラマ令和編

旅行記⑤

ボルブドール遺跡のスチューパ

アマンジオ、コピルアックのことも…

「ジョグジャカルタ編」がまだ続きます。

「パオン」寺院の前に「コピルアックコーヒー」の専門店があります。このお店はコピルアックコーヒーしか扱っていません。コピアルックとはジャコウネコの糞の中のコーヒー豆をきれいにしてから焙煎する、変わり種のコーヒーのこと。高級品です。詳しいことは略。

コピルアックコーヒーは東南アジアで時々見られるけど、インドネシアが本場らしいです。とはいうものの、本物か偽物かを区別するすべはないというネット記事を見たことがあります。強いて言うと価格でしょうか。このお店は「本物です」と中辻さんが言います。それは信じて良さそうです。実際、お店には数匹のジャコウネコがいました。それは観光用で、コーヒーのプランテーションで飼っているものではありません。ジャコウネコが糞をする場所は決まっていません。それを見つけるために人手が必要になります。それも価格を高くしている原因とのこと。

ジャコウネコの糞を乾燥させている（コピルアック）

試飲も可能です。２種類ありました。試飲も有料で、安くはありません（笑）。味はまあ私の口では普通のおいしいコーヒーというところ。土産にするには高すぎます。普通のコーヒーの20倍近くの価格です。別のお店で普通の地元のコーヒーを自宅用に購入しました。中辻さんがいつも買っているお店とのことです。

ランチは楽しみにしていた「アマンジオ」。アマングループの１つです。泊まるとお一人様８万円だとか。アマンジオは丘陵地にあり、全体像は見えません。セキュリティは当然厳しく、予約の確認、車の中を見る、さらに金属探知機のような物で車の周囲を調べます。

車を降りエントランスを入ります。現代の遺跡のような雰囲気です。喧噪はなく、ひっそりとしています。ガムランが石の建物に溶け込んで響いているように聞こえます。

床も、天井も、柱もすべて石造りのようです。大理石のように光っています。エントランスからロビー、レストランには戸や窓はありません。ガラス窓がないのです。壁もありません。柱だけ。開放的過ぎるほど。レストランのほぼ中央部に案内されました。遠くにボロブドールのスチューパが見えます。絶景です。

スタッフは音を立てることなく、サービスしてくれます。姿勢もきりっとしています。スタッフを見るだけでも、普通のレストランとは違うという雰囲気があります。

アマンジオでのランチ

とはいっても私たちはこんなところには慣れていません。メニューも良くは分かりません。中辻さんに助けてもらって注文する始末。別の欧米人のカップルも、メニューを見ながらスタッフと何度もやりとりしていました。

１時間半ほどかけてゆっくりと食事をしました。アラカルトメニューで、ジャワの温野菜サラダ（ガドガド）、牛肉のスープ、アヒルのソテー、デザート、飲み物で二人で１万円（税込み）ほど。決して安くはないけど、職場の宴会費用よりは安い（笑）。プチ贅沢気分を味わせていただきました。機会があれば再訪したいと思いました。泊まろうとは思わないけど…。

アマンジオのテラス
右側はレストラン。吹き抜け

昼食後はいよいよボルブドール遺跡へ向かいます。入場料金は外国人は20米ドル。それを当日のレートでルピアに換算して支払います。20ドルは現地の物価水準から考えると極めて高いです。日本の水準からしても高い。日本のお寺の入場料金は金閣寺、清水寺、二条城でも四百円です。こんなことを話題にすること自体が私の品格を下がることになりますね。でも、大事な情報なのであえて（笑）。

ボルブドール遺跡は十分には解明されていないそうですが、８世紀ごろに50年の歳月をかけて作られたようです。その後、千年以上もジャングルの中で火山灰に埋もれていました。そのことを想像するだけでも奇跡的な建造物というロマンが広がります。

釣り鐘のようなストゥーパはボルブドールの象徴的な塔ですが、それは地上からは見えません。回廊が３段になっており、それぞれの壁面にはレリーフが描かれています。いくつかは中辻さんの説明を受けました。人間の煩悩が描かれているのもあり、今と同じだと思ってしまいました。

上に上がると、一気に巨大なストゥーパが目に入ります。思わず「オー」という声があがります。幸い観光客が比較的少なく、ゆっくりと回ることが出来ました。写真もたくさん撮れました。

この旅行記には「地球の歩き方」やネットで得られるような情報は書いていません。

教室はドラマ令和編

旅行記⑥

遺跡の修復は興味深い

百年前にオランダが、40年前にユネスコが

ブランバナンにしても、ボロブドゥールにしても「修復」という作業がありました。千年もジャングルの火山灰に埋もれていたため、石自体はそのままでも崩れています。地震や木の根、重みなどがあったためでしょうか。

それをオランダが１９００に数年かけて修復します。オランダはボロブドゥールの文化的な価値を認めたからです。でも、当時は今のような修復技術がなかったため、石の間にセメントを入れて組んでいます。

その後、１９７３年からユネスコがコンピュータで石の一つ一つに番号を付けて組み直しをしています。欠落を補填した石には中央部に１cmほどの印が付けられています。ユネスコのルールで補完するのは30％以内と決められていることも中辻さんに教えていただきました。修復の話は興味を持ちました。

補填したことを示すマーク（ユネスコ）

修復でもう一つ思ったこと。それはメインになる大きな塔の部分はきっちりと修復されていますが、周囲の小さな塔は全く修復されていません。ブランバナンは二百以上の塔があったのに、すべてが崩れたままです。それは元の形が分からないので修復できないということで、発見されたままになっているという説明を受けました。

修復不可能な石材は発見されたままの姿で保存されている

ブランバナンの中央部の高い塔の周囲には多くの、直方体に整えられた石が小山のようになっています。あえて無理して修復しない。今後、考古学が進むと修復されるかもしれません。それまではいじらない方がいいわけですね。オランダの修復技術が十分ではなかったのをユネスコが再修復したように。残念なのは修復前のボロブドゥールの写真がないことです。

日本人ガイドの中辻さん

ボルブドールの入場料金には軽食が含まれています。なぜかお腹が空いていなかったので、飲み物だけにしてパンは宿に持ち帰りました。

ボルブドール遺跡の観光としては「サンライズ観光」が人気があります。日の出で午前３時半頃ホテルのピックアップだとか。それを聞いて断念（笑）。体調を崩してしまいます…。中辻さんの話では晴れていてきれいに見えるのは数回に１回程度とのこと。

中辻さんはボルブドールでのサンセットを勧めてくれました。これは時間的にも、混雑という点でも、良さそうです。でも、前日のイジョ寺院でのサンセットに満足したので断念しました。

ボルブドール遺跡の写真を多めに掲載します。

露出した仏像。東と西の２体は修復の際、あえて露出させた。絶好のインスタスポット

iPhoneのパノラマ機能で撮影したスチューパ。実際にはこのように直線には並んでいない。円形に配置されている。

教室はドラマ令和編

旅行記⑦

ジョグジャカルタの最終日

バティックの半袖シャツが唯一の土産

２日目のホテルはお店が多い通りにある「メリア・プロサニー」です。このホテルは１万円以下（２人、朝食付き）なのでさほどの期待はしないで、ロケーションの良さで選びました。ところがなかなかの高級ホテルでした。ロビーも部屋も広かったです。それにきれいだし。

夕食のためのレストラン街も近いというメリットがあったけど、やや疲れていたのとそれほどお腹がすいていないという事情があり、外出はしませんでした。せっかくのホテルチョイスが無駄になったかも。

外出はしないと書いたけど、ホテルの隣にスーパーがあります。そこで食べ物を買ってきて部屋で食べました。これだとローカル的な雰囲気の上に、お財布にも優しいです（笑）。そのスーパーではアルコールが売っています。でもインドネシアではアルコールはやっかいものという扱いのようで、このスーパーではせっかく扱っているのになぜかレジカウンターの中に置いてあるのでレジの時にお願いする必要があります。おまけに普通の棚に置いてあるだけなので冷えていません。

他の飲料はすべて冷蔵された棚にあるので冷たいのをかごに入れることができます。アルコールの扱いは冷たい…けど、冷たくないビール…。日本語で書くと混乱してしまいます。ホテルの部屋に戻ってからすぐに冷蔵庫に入れて冷やしました。瓶の方が冷えやすいと思って買ってきたところ、部屋には栓抜きがない。フロントにお願いしました。

ただ部屋の真下が交差点。夜中までバイクの音が。そして午前３時にはバイクの戸が響いていました。市場は３時頃に開き、８時には閉まるとか。朝が早いです。

３日目、つまりジョグジャカルタの最終日。ピックアップは遅めの９時半。このホテルの中庭は素敵です。ロビーも広い。ゆっくりと過ごしました。

今日は中辻さんはいません。ドライバーだけです。英語を話せるドライバーですが、インドネシア風の発音にはなかなか慣れません。アメリカ人の流ちょうすぎる英語はさらに困りますが。どっちにしてもシニアの英語力は聞き取りが苦手です。でも、そんな弱音を吐いている場合ではない場面が最終日に空港でありました。予約してあった飛行機がキャンセルされていると言われたのです。ガルーダのカウンターで１時間半折衝しました。もちろん英語で。詳しいことは後ほど…（大汗）。

最終日の見学は王宮だけです。クラトンといいます。日本語ガイドをお願いしました。でも、あいにく不在だったので案内人はありません。入場料金は安いです。百円ほど。

中に入ると屋根のあるステージで伝統芸能が演じられていました。人形の他、楽団がガムランなどを使って奏でています。総勢20人ほどいました。ここで20分ほど王宮文化に浸ります。

さらに進むとなぜか大きな木の枝を伐採していました。高い木なのに手作業でした。王宮で使われた道具や家具、写真などが展示されています。建物がいくつもあり、広いです。ガイドがほしかった。

次にお願いしてあった「バティック」のお店へ行きます。ジョグジャカルタはバティックの本場でもあります。バティックはロウを使う、ろうけつ染めのこと。価格は模様の付け方で異なっています。手書き、型押し、プリントの順に安くなります。老舗の大型店に案内してもらい、作業様子を見学しました。型押しはロウをアイロンのように生地に押しつけます。ずれないようにする技は素晴らしかったです。

つなぎ目を正確に（型押し）

自分用に半袖シャツを購入しました。手書きと型押しのコンビネーションです。大きな模様は型押し、細かいところは手書きになっています。

お昼はドライバーが連れて行ってくれます。楽ですね。銀細工店を併設している、おしゃれで雰囲気の良いお店でした。

その後は空港へ送ってもらいます。途中「バッピア」というお菓子の工場に寄りました。かなり混んでいます。小さな饅頭が弁当箱のような大きさの紙箱に入っています。作りたてで、温かいです。２箱買って１箱は運転手さんに。中の饅頭はむき出しです。個包装がないのです。あれっと思いましたが、郷に入りてはというところ。25個入って３万ルピア（２４０円）。

やや早めに空港に着きました。３日間御世話になった運転手さんにはしっかりお礼を言いました。もちろんチップも（笑）。

空港であたりを見ると、なんとバッピアというお菓子の段ボールを持った人を何人も見ました。後で調べてみると、ジョグジャカルタの定番の土産だとのこと。だから、空港近くのお店はあんなに混んでいたのです。個包装はないけど、みんなに分けやすいです。

ホテルの朝食。中庭での野菜炒め

教室はドラマ令和編

旅行記⑧

恐竜の子孫「コモドドラゴン」

さすまたを持ったレンジャーが前後をガード

ジョグジャカルタではインドネシアのディープな面を見ることが出来ました。ビルが建ち並び、モールには日本食も多いジャカルタの中心部とは同じ国とは思えないほど。

ジョグジャカルタから戻った翌日は孫たちも成田からジャカルタに到着し、合流します。合わせて６人の大所帯です。今後、数日間はこのメンバーでの旅行となります。

日本人はほとんど訪れることがないであろうフローレス島へ向かいます。コモドドラゴンというオオトカゲを見るためです。

フローレス島にはラブアンバジョーという空港があります。別名はコモド空港。フライトはジャカルタからは１日２便、バリ島からは１日８便があります。バリ島のついでにということなのでしょうか。

日没近くのホテルのプール

フローレス島の宿から船でリンチャ島へ向かいます。見かける船はほとんどが木造です。１時間で到着。

コモドドラゴンの看板に迎えられます。案内は英語です。レンジャーの人たちは全員木製の手作りの「さすまた」を持っています。それを見たときに一気に緊張します。コモドドラゴンは恐竜の子孫とも言われ、一説では地球上で最強らしいです。動物の中には天敵はいないという話も。

このコモドドラゴンが生息するのはコモド島とリンチャ島だけのようです。それぞれ1500頭が確認されており、絶滅危惧種とのこと。肉食であるだけではなく、毒を持っておりその毒は最強の毒蛇にも匹敵するとか。しかも動きが素早い。となると危険極まりないです。

さすまたを持つレンジャーからは５ｍ以内には近づかないようにきつく言われています。柵はありません。観光用に通路があるのでそこを歩きます。前後にレンジャーがつきます。私が写真を撮るために遅れるとレンジャーも止まって待ってくれています。そして私を先に歩かせます。

周囲は低木の木があり、いかにも危険な動物が出てきそうです。数分歩くと前のグループ数人が止まって写真を撮っています。なんと無造作にコモドドラゴンが寝そべっています。初のドラゴン。夜行性だけど、昼間も寝ているわけではありません。鋭い視線をこちらに向けると、ぎょっとします。舌を伸ばしながら歩いているのもいました。

命がけのカメラマン（レンジャー）

レンジャーが左を指さし、「バッファロー」と言います。浅い池の中に３頭の水牛がいます。レンジャーがこともなげに「ドラゴンの餌になります」と。１頭の水牛を20頭のドラゴンが20が食べるそうです。恐ろしい。山羊も見ました。猿もいました。山羊は餌になります。肉食というのはこういうことなのですね。

最強の動物コモドドラゴン　もちろん生きています(^^)/

数頭のドラゴンが建物の近くに固まっています。頭をもたげて様子をうかがっている恐ろしそうなのも。この建物は簡易食堂です。においに群がっているという説明がありました。おそろしい。

またもや数頭の大小のドラゴンが集まっています。その１頭のドラゴンの近くでレンジャーが姿勢を低くして写真を撮っています。観光客はドラゴンから離れたところにしゃがみます。良く分からなかったけど、レンジャーが勧めてくれるのでカメラを渡して他の人と同じようなポーズを取りました。すると、なんと素晴らしい写真ができました。実際のドラゴンよりも大きく見えます。まさにインスタ映えする写真！

歩いていると、木の枝に動物一頭の骨がひっかかっています。恐ろしい…。

このツアーでは子どものドラゴンも合わせると30頭以上は見られたと思います。「子どものドラゴンも危険なのか」と問うと、レンジャーは「イエス」と言いながらこちらに頭を向けた子どもをさすまたで方向を変えていました。最強の動物とはいえ子どもはなんとなくかわいい感じがします。

フローレス島のアヤナというホテルに２泊しました。私にしては珍しくホテルでゆっくりとしました。プールに入ったり、ロビーでくつろいだり。街中へ出たくても、バスも、タクシーもないというロケーションなのです。そのため高級ホテルでの滞在を楽しむということになりました。

ホテルをバックにご一行様(^^)/

教室はドラマ令和編

旅行記⑨

最終日は「タマン・サファリ」へ

ドラゴンツアーは日本人ばかり４組

リンチャ島入り口。看板はコモドドラゴン

リンチャ島でコモドドラゴンを見た後、シュノーケルをします。これも、楽しみでした。ホテルの周囲の海には珊瑚はありません。そのため魚もいません。シュノーケルスポットは限られているようです。そこに船は向かいます。

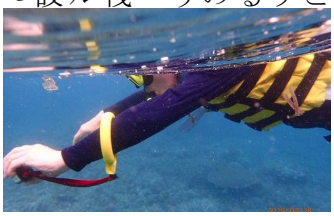
シュノーケルのセットを一式借りることはできます。でも、私は日本から愛用のセットを持参しました（笑）。シュノーケルのマスク専用の近視矯正用レンズを持っています。簡単なものだけど、これがないと周囲があまり見えません。いわば必須です。

この半日ツアーは４組の客がいました。それがすべて日本人ばかり。ジョグジャカルタでは日本人を見ることはほとんどありませんでした。フローレス島のツアーというマイナーな場所に日本人が何人もいます。日本人はいないだろうという予想は大外れ。フローレス島のアヤナ・リゾートは日本でも宣伝しているようです。ホテルの随所に日本語の説明があります。

ホテルは斜面にすり鉢状に作られており、すべてオーシャンビュー。一番上の階がロビーというややこしい構造です。ロビーから海側を見ると、とんでもなく素晴らしい景観が広がります。３日目、ロビーの横のバーの方に行ってみると、ホテルの海側の全景が一望できるロケーションでした。ホテルの左右はまるでジュラシックパークの世界のようです。この違いがリゾートたるゆえんなのでしょうか。

２階が桟橋やプールなどの施設につながっています。私、初日はプールに孫たちと入り、遊びました。

今回のインドネシア旅行では何度か飛行機に乗りました。地方空港はタラップで乗り降りします。タラップは飛行機に搭乗するという雰囲気があるので好きです。ジョグジャカルタではタラップを降りてから空港の建物に沿って５分ぐらい歩くと、ようやく「到着」という表示が見えました。歩いているそばをスーツケースを運んだり、タラップを押して移動させたりという、いわば空港の裏側が見えます。楽しいけど、雨が降るとたいへんです。びしょ濡れ必死。


勇姿。私です(^^)/

フローレス島から戻った翌日はジャカルタ郊外のサファリパークに行きます。「タマン・サファリ」です。「地球の歩き方」には出ていません。そのため日本人の観光客はいないようです。そもそもジャカルタに観光に来る日本人はあまりいません。ジャカルタに来る日本人はビジネスです。

この４月、郊外のチカランに日本人学校が新設されています。そしてなんと私の東京在住の知人がその新設校に教員として派遣されているということを知りました。私のジャカルタ旅行の１週間ほど前に赴任されています。幸いにも連絡が取れ、休日に市内のモールで会うことができました。いくつかの偶然が重なった奇跡的なジャカルタでの再会となりました。新設校のため物もなくたいへんなはずなのに、担任兼教務主任として学校の柱になっていると聞きました。お互いに健康に気をつけましょうと言って、別れました。

奇跡的なツーショット

海外で知人と日程を調整して会うことは特別な楽しみです。海外の異文化と出会うことはもちろん刺激になるけど、旧知の日本人と会って情報交換することは特に楽しいことです。日本人であることを意識する時間でもあります。

話がそれました。タマンサファリのこと。サファリですから郊外です。なのに渋滞がひどいです。平日なのに朝から混んでいます。そんな中、たくましく生きるインドネシア人がいます。渋滞の車の間を歩きながら物を売っています。豆腐の揚げた物や花、ティッシュなど。

さらに驚いたこと。それは車の右折や合流の際、道路の真ん中に出て交通整理をする人がいること。それはボランティアではありません。車がカーブを切って曲がる際、運転手が手慣れた様子でチップを渡します。交通整理の男性も当たり前のように黙って受け取ります。渋滞の中。ハンドルを切りながらチップを渡す運転手、車を誘導しつつ身をかわしてチップを受け取る男性。見事な「文化」といえるでしょう。いや、見事なビジネス。ちなみにチップは２千ルピア（16円）。

タマンサファリに近づくと、道の左側に土産物屋のようなお店が列をなして並んでいます。みると赤い小さなニンジンがすだれのようにぶら下がっています。その上にはいわゆるモンキーバナナも房のままぶら下がっています。これは動物園で使う餌なのです。

教室はドラマ令和編

旅行記⑩

タマン・サファリで餌やり

巨大なテーマパーク。手渡しで餌を

日本の動物園では餌をやることは禁じられています。このタマンサファリでは餌やりが最大の見せ場になっているのです。でも、車でサファリの中に入ると、途中何カ所か「餌やり場」とか「餌やりはここからは禁止」などという表示が出ています（英語とインドネシア語）。

餌やり禁止というのは虎やライオンなどのエリアで肉食動物がいるため窓を開けることは厳禁だということ。窓には鉄格子が入った車のレンジャーが肉食エリアでは必ず見張っています。

このタマンサファリは入場料金が高めです。運転手にまで請求されます。餌代などがかかるのでしょうね。

中に入ると最初に見られるのが象。それも１頭や２頭ではありません。20頭以上の象に近づけます。バナナを放ってやると、長い鼻を使って食べてくれます。動物への餌やりは動物と一体感が感じられるのでとても楽しいです。

これは水牛。ドラゴンがいなくて幸せ

ドアまで近づいてくる鹿

象はこれだけではなかった

大口を開けるカバ。餌をあげると食べる。かわいい

カバの写真はガラス越しだったので見えにくいけど、大きな口をいっぱいに開いてくれます。そこへニンジンを入れてやると、食べてくれます。細いニンジン一本では申し訳ないけど、他の客もあげることでしょう。

鹿やシマウマのように車に近づいてくる動物もいます。そんな動物には手で直接口に入れてやることができます。手をかじられないかと不安になりますが、大丈夫でした。動物の呼吸音が聞こえるほどの距離です。車の窓ガラスのところに口を伸ばしてくるのです。

動物も車の方を見て口を開けるなど、愛嬌があると餌をあげたくなります。動物の世界も愛嬌ということでしょうね。

肉食の虎はこのざま。襲われないという自信か…コモドドラゴンを借りてきたい(*^_^*)

猿にバナナを放ってやると、器用に皮をむいて食べています。餌としてニンジン３束（１束には３本縛りが10組ほど）とバナナ２束を買って持ち込みました。でも、６人いたので、これでは不足気味でした。もう少し餌が多かったらさらに餌やりを楽しめるところでした。

この餌はサファリが公式に販売しているわけではなく、お店がいわば勝手に販売し、客が勝手に持ち込むという構図です。でも、それはサファリが黙認どころか公認しているかのようです。なにしろ「餌やりゾーン」などという表示があるほどですから。

こんなお店がサファリの近くに数十件並んでいます。ニンジンはみずみずしい

もしこのサファリに行く人がいたら平日の朝早く（それでも渋滞はある）ということと餌は多めに買うこと、さらにニンジンのひもを切るためのハサミが会った方が良いということ。

タマン・サファリ、動物がいるだけではありません。巨大なテーマパークになっています。遊園地もあり、小学生の遠足児童も多くいました。一番奥にはパンダが２頭います。そこは食堂と一体になった大きな建物です。インドネシアでもパンダの扱いは別格のよう。私たちが行ったときは２頭とも寝ていました。

私は富士サファリには行ったことがないけど、ブログを見ていると比べようがないほどこのタマンサファリが素晴らしいという感想を持っている方がいました。１日ゆっくりしたいところです。

私の耳元で「餌、ちょうだい」

教室はドラマ令和編

旅行記⑪

帰りの飛行機に乗り遅れる

これも「海外旅行あるある」か…

昼過ぎにこの動物園を出て、ジャカルタ空港に向かいます。帰りの飛行機は午後７時。渋滞があるので余裕を持って出たはずなのに、自然渋滞に加えて事故渋滞が２カ所も。そのため７時の飛行機は間に合わないだろうという判断をせざるを得ませんでした。痛恨。

フライトの変更のことなどでシンガポールやアメリカに電話していろいろと交渉します。これは長男がしてくれました(笑)。マイレージの優待チケットだったので変更がややこしい。

帰りの便はガルーダの関空行きを押さえました。午後11時20分発。代理店からはイーチケットは届かないものの、予約番号が発行されました。ガルーダのサイトを見ると、私たちの名前が確認できます。チェックインは空港での表示があります。

空港へ着き、チェックインをしようとすると別のカウンターを案内されます。そこでガルーダの係員が「フライトはキャンセルされています」と言うのです。支払いはカードで済ませているし、予約番号が送られてきたメールを見せるなど交渉しました。長男は空港には来ていません。

係員は「エージェントがキャンセルしている。エージェントと話してほしい」と言うだけです。

そんなことをやりとりしていると、代理店から「フライトは航空会社によりキャンセルされた。代金は返金する」というメールが届きます。それをカウンターに見せて交渉を続けます。でも、ダメなようです。

４月30日の夜のことです。10連休の後半ではないので、日本への帰国便はまだ空席があります。この夜便にするか、１日遅らせるか、それは価格との兼ね合いがあります。ガルーダの場合、関空便よりも羽田便の方が半値なのです。理由は分かりません。関空便の価格を羽田便と同じに下げてほしいと交渉しました。フライトがキャンセルされたという事情もあるし、空席で飛ぶよりも価格を下げても売れた方がいいだろうということも言いました。

係員は上司を呼んで来ました。これは好感触と思いつつ、必死の訴えをします。でも、コンピュータを指さして「これがダメ」と言います。ガルーダのようなキャリアフラッグは担当者の裁量権はないのでしょうね。まあ納得せざるを得ません。新幹線代を加えても羽田便の方が安いので、羽田便を購入しました。大きな荷物を預けてやれやれ。

この間、１時間半。途中少しだけベンチに座っていたことがありましたが、大半はカウンターで粘っていました。ガルーダインドネシアの２人の担当者は終始、ていねいに対応してくれました。上司と相談したり、コンピュータを操作したりして事後策を考えてくれたようですが、無理でした。そもそも私の要求が無理難題だったのです。

悪いのはチケットを発行しておきながら直前に一方的にキャンセルした代理店です。カードで支払った代金が戻ってきたら良しとせざるをえません。

最終日、とんでもないトラブルがあったけど、私も妻も、そして６人が体調を崩すことのない２週間でした。長男の仕事のことは分からないけど、勤務しているビルやアパート、出入りしているレストランやモールなどを間近に見て安心できる旅でした。さらに家族・親戚６人での海外での旅。

想定外のこともいくつかありました。その１つは楽しみにしていた果物が考えていた味ではなかったこと。筆頭はマンゴーです。熱帯のインドネシアでは１年中マンゴーがとれるのだろう思っていました。ところがスーパーには並んでいません。聞くと、マンゴーは11月か12月といいます。いわゆる雨期ですね。残念、タイでは一年中マンゴーがとれるはずなのに。

でも、執念のマンゴー。あるときスーパーで見つけました。店員に「甘い？」と聞くと「サワー」との返事。でも果敢に買いました。重さで値段が決まるので１個がいくらだったか不明。触ると固い。１週間ほど置いておくと少し柔らかくなりました。切ってみるとなんとか食べられる味でした。甘さもほんのり。

スイカは１年中あるようです。食事のデザートにも出てきます。スーパーでは１個まるごとも売っていますし、切ったのも並んでいます。色は赤くてみずみずしい。おいしそう。だけど、食べると甘くはないのです。水分は多いけど。さすがにすっぱくはないけど、甘くないスイカは日本人はスイカとは言いません！

マンゴスチンやドラゴンフルーツも試してみました。数日、置いておくと甘みがでました。バナナは普通においしい。特にサファリで餌にしたモンキーバナナはおいしかった。餌にする前に味見しました(笑)。孫も食べていました。

今度、行く機会があればローカルの食堂で自力で注文できるだけの準備をしていくつもりです。モールで、吉野家や大戸屋、ラーメンなどを日本よりも高い価格で食べていました。分かる料理はナシゴレンだけ。情けなかったです。

11枚の旅行記が完結。読んでいただいた方に感謝。

ボルブドール遺跡が作られたことを示す物証。サンスクリット文字が書かれている。興味深い

教室はドラマ令和編

旅行記⑫

カカオとコーヒーの大生産地

なのにあまり日本では知られていない

「インドネシア旅行記」の追加です。これが本当の最終号です。合わせて12枚となります。

自分への土産はバティックの半袖シャツだけと書きましたが、小物が少しあります。アラビカコーヒー豆、それとモンゴチョコレートです。どちらもインドネシア産です。

コーヒーは赤道から25度以内が産地とされており、コーヒーベルトと呼ばれています。インドネシアは25度の範囲内に入っており、オランダが支配していた頃からコーヒー豆が栽培されていました。今、大半はロブスタ種とのことですが、土産に買ってきたのはアラビカです。旅行中、コーヒーの木や豆を見ることがありましたが、コーヒー農園を見たかった気もします。ゴムの木も見たかったけど、これはジョグジャカルタでも無理でした。

チョコレートのこと。原料のカカオはコートジボワールが圧倒的に多くて世界第１の産地です。２位はガーナ、そして３位はわが（？）インドネシアなのです。

カカオの産地は高温多湿の熱帯で、赤道をはさんで北緯20度から南緯20度までに限られます。さらに、高度は５百から２千ｍで、年間平均気温が約27℃で気温差が小さく、年間降水量は千㎜以上であることといった条件が必要とのこと。カカオを生育するのには、地域がかなり限定されていることが分かります。

で、モンゴチョコについての講釈を若干（笑）。左の罫線で囲んだ説明は中辻さん（説明は不要ですね）の会社のサイトを引用しました。価格は細いバーサイズの小さなチョコが３万ルピアです。スーパーでは２万２千ルピア（二百円）ぐらいで売っています。他のチョコに比べると高いです。輸入品はもっと高価。

モンゴチョコのダークという甘みの少ないのを食べながらこの後日談を書いています。

私の財布には１枚の小さなレシートがあります。９９４万ルピアとなっています。発行元はガルーダインドネシアのプレミアムチェックイン、ＣＧＫとなっています。ＣＧＫというのはスカルノハッタ空港の略号です。

期日は４月30日21時57分。インドネシアの時間帯ではあと３分で午後10時です。日本との時差はプラス２時間ですから、日本時間では平成が終わる３分前なのです。

日本では平成から令和に変わる瞬間です。テレビでは各地の様子を中継していたはずです。まさにその時間、私はジャカルタの航空会社のカウンターで帰国便の折衝を終え、ようやくチケットを購入したところでした。その時の私には日本との時差を考えたり、令和になるという想像をする余裕はありませんでした。

インドネシアのルピアは桁数が多いので円への換算が面倒です。０（ゼロ）を２つ取って、さらに０・８をかけるといいようです。もっとも税金が10％かかり、食堂ではサービス料が10％かかるので０・８をかける必要がないこともあります

で、帰国便の代金はカードで調べると７９２９１円が引かれています。１人では４万円ということ。片道チケット、しかも直前に空港で買ったにしてはリーズナブルです。粘ったかいがあったというもの（笑）。

右の写真はアパートのパーティ（？）で知り合ったご夫婦。南アフリカの大手生命保険会社の社員で、今はジャカルタの日系損保に出向中とのこと。教員をしていたというと「20年前と今では仕事の中身が変わってきているか」と面倒なことを聞かました。「イエス」と言ったところ、当然のことのように理由も聞かれました。こういった出会いも、旅の楽しみのひとつです。

翻訳機の「ポケトーク」はテストではインドネシア語を日本語にかなり正確に翻訳してくれます。でも面倒なので使うことはなかったです。

インドネシア・フリークになれたかな。再訪問はあるのかな…。

（完）

インドネシアはカカオ生産第３位の国です。ボロブドゥールから少し山の方に入ったところにもジョグジャカルタにもカカオプランテーションがありますし、民家の庭先に１本２本植わっていることもよくあり、このあたりでは確かによく見かける木の一つです。

「世界有数のカカオ生産国のわりには美味しいチョコレートがない。それなら自分で作ろうじゃないか！」とあるベルギー人が奮起して始めたお店がこのモンゴ・チョコレートです。

ジャワ島で取れるカカオのみを原料として作られるチョコレートは濃厚で美味。包紙やデザインも凝っています。値段もそれなりにいいので、大事な人へのお土産にはぴったりです。